土づくりと獣害対策のために、秋起こし（稲わらすき込み）を行いましょう！

収穫後の稲わら・稲株を秋にすき込むと、堆肥散布と同等の土づくり効果が期待できます。また、『ひこばえ』は、シカ・イノシシなどの餌となるので、これを減らすことができます。できるだけ気温の高いうちに、すき込んで、翌年の米作りにつなげましょう。

【秋起こしの方法】

時 期 の 目 安　　稲刈り後～10 月下旬　（気温が高いほどわらの分解が進みます）
　　大麦播種作業などの前後の時期にあわせて作業をおこないましょう。

作 業 ポ イ ン ト　　圃場が乾いているときに、稲わらと土が混ざる程度に荒く起こしましょう。

◎　土づくりの効果

気温の高いうちに稲わらをすき込むことで、分解が進み、田植え後のワキ発生（硫化水素やメタンガスなど稲の生育に悪影響を及ぼす）を軽減できます。あわせて、堆肥を施用するのと同じように、有機物の補給が地力向上につながります。

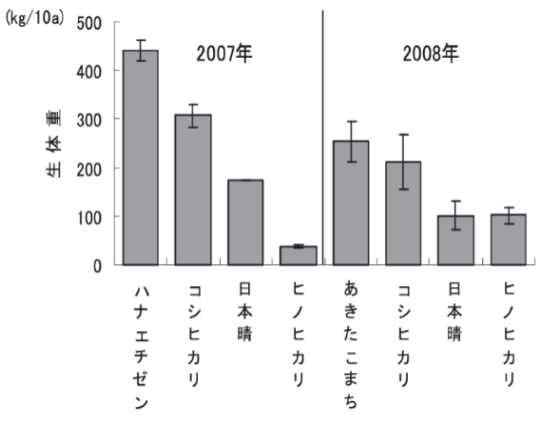
◎　獣害対策の効果

冬期はシカやイノシシにとって餌が少なく、その年に生まれた幼獣など体力のないものは死んでしまうことも珍しくありません。しかし稲刈り後、秋起こしをせずに『ひこばえ』を生やしたままにしたり、柵の管理を止めたりすれば、**田んぼは越冬を助ける餌場**になり、栄養状態が良くなることで、冬を越し、さらに翌春には多くの仔が生まれることを助けてしまいます。

農作物被害を減らすため、地域で捕獲を進めていますが、**気づかずにエサ場を作って、増えるのを助けていて**は、捕獲の効果も上がりません。

稲刈りが早いほど、収穫が早い品種ほど、再生するヒコバエの量が増えますので、中山間地など**鳥獣被害の多い地域は特に、『ひこばえ』を大きくしないように秋起こしを必ず行いましょう。**

シカやイノシシにエサを与えないためにも、できるだけ、**電気柵等の管理は秋起こしが終わるまで続けましょう。**



品種別ヒコバエの生体重
（滋賀県農業技術振興センターの調査から）

注意して頂きたい項目

目的　米の収量・品質向上のため、今一度、秋起こし・土づくりを見直す
　　稲刈り終了後から 10 月下旬までに行うことでヒコバエの発生を抑える

【秋起こしの目的】

① 稲わらの腐熟を促進する効果

・ 稲わらの腐熟を促進することで、翌年の代かきを行いやすくし、水田の保水力向上や肥沃度の向上につながる。

② メタンガスの排出量を削減する効果

・田植え後の湛水状態で稲わらが分解する時にメタンガスが発生するため、秋起こしにより腐熟を促進することで発生量を削減できる。
・温暖化ガスであるメタンの削減は地球温暖化防止につながる。

③ 田植え後のガス害対策

・稲の生育遅延の原因である硫化水素は、田植え後、気温が高くなる 5～6月頃に稲わらの分解により発生するため、秋起こしにより腐熟を促進することで発生量を削減できる。
・温暖化防止と水稲経営の面でも効果あり。

④ シカ・イノシシ・サルの餌を減らす効果

・稲刈り後に再生する『ひこばえ』は、シカなどの餌となる。
・『ひこばえ』は、個体数を増加させ、また田んぼを餌場と覚えさせてしまう。その結果として農作物に依存したシカ・イノシシ・サルが増え、農作物被害の原因となっている。
・被害の多い中山間地域等では、秋起こしを被害対策の一つとして地域全体で取り組むことも重要。

滋賀県農業技術振興センターの調査によると、収穫の早い早生品種ほど『ひこばえ』の再生量は多く 300～400kg/10a となる。近年は高温により収穫時期が早まっており、品種にかかわらず再生量は多くなっている。
1頭のシカは1日3～4kg の生草を食べることから、『ひこばえ』が生育した 10a の田んぼは、餌の少ない冬期3カ月にシカ1頭分を養う餌場となっている。
集落にこのような田んぼが 10ha あれば 100 頭のシカを養えることになる。

【その他】

・大麦播種後の10～12月にシカにより食害される地域が増えていることから、稲刈りが終わった後も、できるだけ電気柵や金網柵の管理を継続し圃場に入らせないようにする。特に中山間地域など被害の多い地域は注意する。